15. 竜になった少年

各務原市立那加第二小学校６年
安藤　叶恵　　大山　育巳　　杉本　来夢
村瀬　有香　　光石　汐里
↓
敦賀市立中郷小学校５年
田代　千佳　　市川　裕理栄　　桑村　順子

ガバッ
「あーー、またあの夢かぁ」
汗をふいて部屋を見回すと、服が散乱して、破けた本がばらばらになって、部屋中がごっちゃごちゃになっている。
階段を下りると、じいが朝食の準備をしていた。
「おはよう、じい」
「おう、龍魔おはよう」
今日の朝ご飯はパンと牛のミルクだけ……。
いかにも山小屋ってかんじ……。
「いっただっきまぁす！」
「昨日の夜は、新月じゃったのう」
また新月の夜に、ぼくが竜になる夢を見ちゃった。
最近新月の夜にだけ、竜になってあばれる夢を見るんだ。
まだだれにも言ってないんだけど。
「行ってきまあす」
ぼくは口にパンをくわえたまま家を出た。
「おっはよう！　龍魔」
こいつはぼくの幼なじみ、あやめ。
実はぼく、あやめのことす、す、す、好きなんだ。
あーー言っちゃった。それに、あやめの前では強がって、「おれ」って言ってるんだ…。
「おれ」って言ってるぼくってちょっと複雑……。

キーンコーンカーンコーン

「龍魔、いっしょに帰ろーー」
「今日、遊ばなあい？」
「遊べるよ。オレンち来る？」
「うん。やった！　龍魔んちなんとなく、不思議なかんじがして楽しいもーーん」
「そうか？」

「ただいまあ」

「おかえり龍魔。おや、今日はあやめちゃんもいっしょかい？　ゆっくりしてっていいよ。わしはでかける」
「じゃ、二階行く？」
「いくいくーー」
　タタタターーガチャッ
「うわあ、きったなあい。どうしたらそんなにきたなくなるのよーー」
「お、おれは、やってない……と思う。きっとだれかがやったんだよ」
「こんなにきたないとこ、いられなあい。龍魔んち探検隊、出っ発！」

　それから、ろう下には、ぼくとあやめだけの足音がひびいている。
　ギシッギシッ
「龍魔、お父さんとお母さんいなくて、さみしくないの？」
「そりゃあさびしいよ。でもお父さんとお母さんとおそろいの時計があるから、平気かなぁ……。ほら、見て！」
　ぼくはろう下のかべにかかっている写真を指した。
「お父さんとお母さんの写真は、この一枚だけ……」
　よく見ると両親の首には、龍魔が手にしている時計と同じ物がかかっている。
「でも、この時計、なんか変なんだよな。時間があってないんだよ」
　でも、両親の時計はゆくえ不明。
　ひそかにその時計をつけている人を探してるんだ。
　少し歩いていくと、床がみょうにポコポコしている。
「なに！　この床！　ジャンプしてみようっと」
　あやめはおもいっきりジャンプした。
　ピョン、ピョン、ピョン、バキッ、ドンッ
　あやめは床の下に落ちていった。
「いったあい！」
「大丈夫か？　あやめ！　今、助けにいくか……おっとっと」
　ドスンッ
「いってえ！　なっなにこの部屋？」
　そこはなんともいえないきみょうな部屋だった。
　さまざまな薬品と、あやしげな本がたくさん並んでいる。
　ぼくはその中から一冊の本を手に取った。
　題名は、『竜になった少年』という本だった。
　ページをめくってみると、主人公「リューマ」と、その友達「アヤ」が登場人物で、悪いおじいさんに魔法をかけられた、リューマが満月の夜に竜に変身する話のようだった。
「ぼくと似てる……」
　背筋に悪感が走った。
　ガタガタ、キュー、キュン
「ん？　なんだ？　こっちに何かいるのか」

「あっ、かっわいいーー！」
　そこには、見たこともない動物がおりに入っていた。
　頭は鹿で、目は少したれ目で大きく、小さなキバが出ている。
　体はまるで……短足の犬みたいで背中に、白い点がいくつかある。シッポはクルクルのリスのよう。どうやらオスとメス、一匹ずついるようだ。
「そうだ。この子達の名前、オスはレオン、メスはさくらに決定！」
「でもどうしてここに……」
　その動物の首を見て、ぼくはハッとした。
　なんと首に、オスにはお父さんの、メスにはお母さんの時計がかかっていたのだ。
「なんで時計を持ってるんだ？」
　時計をしているのが、お父さん達じゃなくて変な動物だなんて……。それじゃ、この動物がお父さんとお母さんっていうのか？
「怖くなってきたぁ。龍魔、もう帰ろうよ」
「うん、そうしよっか……」
「じゃぁな」

　その夜、ぼくはこっそり部屋をぬけ出した。
　――確かここだな。
「とう！」
　　ドッスーン
「あいたたたた……」
　レオンとさくらは、目を覚まし、何か言いたそうな目で、こっちを見つめている。
「今、自由にしてやるからな」
　な、なんか、体が熱いような……。う、苦しい！　うああーー！
　　バタンドスンバタン　バキッ
　あっ、おりこわしちゃった。
「龍魔ぁーー」
　かすかに声が聞こえる。だれだろう。
「龍魔、やめてーー！」
　部屋にあった鏡をふと見ると、大きな竜が映っていた。
「こ、これはぼく？　うそだろう？」
　ぼくは目を疑った。
　でも、確かに鏡の中の竜は、ぼくと同じ動きをしている。
　とつぜん体が楽になってきた。
　　ヒュー
　もう一度鏡を見ると、もとのぼくにもどっていた。
「今のはなんだったんだ」
　その時、
　　ジリリリリリ
　と、レオンとさくらの時計がいきなり鳴りだした。

　すると、レオンとさくらの回りが光った。
　　パァー
　そこには、写真に写っていたお父さんとお母さんが立っていた。
「えっ？　まさかお父さんとお母さん！」
「龍魔、やっと会えたわね。私はあなたのお母さんよ」
「そして、ぼくは、お前のお父さんだ。さっきのことを説明するから、信じて聞いてくれ。お前は毎晩竜になるんだ。そして新月の夜にだけ、竜になる夢を見るんだ。それも全て、あのじいさんのしわざなんだよ。あのじいさんは、悪い魔法使いで、お前も魔法使いなんだ。じいさんは、お前が強力な魔法使いになるのをおそれて、人間になる薬を作ろうとしたが、失敗して、竜になる薬を作ってしまったんだ。どうしてぼく達があの動物になったのかは、お前を助けようとしたら、魔法であの動物に変えられてしまったんだ。じいさんは、またお前をねらってくると思う」
「私達は、毎日龍魔と別れた時間になると、このように、人間にもどるのよ。でも、一時間たったらまたあの動物にもどってしまうの。龍魔、じいさんをたおしてちょうだい！そして私達を助けて。人間にもどれる時間なら、あなたに協力できるわ」
「えっ？　そんな……いきなりそんな事言われたって……。どうすればいいの？」
「急にそんなこと言ってゴメンね。でも、あなたにしかできないの。魔法を使ってみて！」
「で、でも、どうやって？」
「クローン神よ、我に力を与えたし。と言いながら、したいことを願うと、魔法が使えるのよ。願う事にだけ集中して、おそれないこと。この魔法は、自分の欲望には、使えないわ」
「うん。やってみる！　クローン神よ、我に力を与えたし」
　ぼくはそういいながら、近くにある本をうかばせているぼくをイメージした。
　そして――。
　　ふわっ
　近くにあった本がういた。
「うわあ、すごーーい！」
　力をぬいたそのとたん、本はバサッと落ちてしまった。
「最後まで集中しないと、うまくいかないわよ。どんなじゃまが入っても、そのことから思いをそらしちゃいけないのよ」
「はあい」
　　ヒューン　キューン　キュン
「えっ、お父さん、お母さん？」
　また、不思議な動物にもどってしまった。☆
　驚いてレオンとさくらを見ると、二人の時計のベルトに巻物がはさんであるのに気がついた。何だろうと、それぞれの巻物を広げたとたん、レオンとさくらはぼくの前から姿を消してしまった。
「お父さ～ん！　お母さ～ん！」
　さけんでも返事は返ってこない。ぺたんと座り込んだぼくの目の前に、さっきの巻物が転がっている。

「いったい何がかいてあるんだろう」
　広げてみると、二つの巻物は一つの地図になった。
　行き先は『魔法の館』だ。どうやらこの地下の奥に魔法の館があるらしい。この地図をたよりに、魔法の館へ出発だ！

「この魔法の館には、じいさんがいるはずだ。お父さんとお母さんを元にもどすために、じいさんを倒すぞ！」
　と言っても、一人じゃ心細い。そうだ、あやめを連れて行こう。
　地図を見ながら進んでいくと魔法の館が見えてきた。
　その入り口には、頭はライオンで、目は大きくて、体は馬のようで、きばがある、今まで見たこともない奇妙な動物がいた。
　この動物がいる限り、ぼくたちは魔法の館に入ることができない。まずはこの動物を倒さなければならないのだ。
　でもいったいどうやって……。
　その時ぼくは、お父さんとお母さんが言っていたことを思い出した。そしてぼくは、目の前にいる奇妙な動物がおりの中に入っているところをイメージした。そして、
「クローン神よ、我に力を与えたし」
　と言って集中したら、いつの間にかその動物はおりの中に閉じこめられていた。ぼくは叫んだ。
「この魔法の力を使えば、じいさんを倒して、お父さんとお母さんを助けることができるんだ！」
　しばらく門の前に立っていると、ゆっくりと門が開いた。
　その音は、いかにもあのじいさんのかすれ声に聞こえた。
　ぼくとあやめは、魔法の館に足を踏み入れた。
　　こつん、ポト、こつん、ポト
　ぼくとあやめのくつの音と水のしずくが、地面に当たる音がした。ぼくの心は怖さでいっぱいになる。
　でも、あやめは平然と歩いている。そんな男らしいところがあるあやめを見て、ぼくは少しはずかしくなった。そんなことを思いながら、ぼくとあやめは暗い地下の道を進んでいった。
　ちょうど曲がり角に来た。
　ぼくたちが曲がろうとしたその時だった。どこかでじいさんの声が聞こえたような気がした。ぼくはあやめにこう言った。
「ねえ、じいさんの声が聞こえなかった？」
　すると、あやめはぼくの顔を心細そうに見ながら、弱々しい声で
「そう、だね」
　と言った。
　まさにその時、ぼくとあやめの前にはテレビがとつじょあらわれた。しかもじいさんの頭の形をしたテレビだ。
　画面にはじいさんが映っていた。

　その顔はものすごいぎょうそうをしていた。
「よく来たな、お前たち。さっきはよくもおれのしもべを閉じこめてくれたな。このうらみは百倍にして返してやる。はっはっはっ。これから先は暗闇のゾーンと言われる部屋だ。入る勇気はあるか？　そして果たして愛する人と闘えるか？　さあ、入れ！　あっはっはー、あっはっはー」
　じいさんの笑い声がひびきわたる中で、ぼくとあやめは暗闇のゾーンと言われる部屋へ入っていった。
　入ったとたん、真っ暗やみになった。怖くなって引き返そうと思ったが、とびらはすぐに閉まってしまった。あやめがどこにいるかさえわからない。
「あやめ～、どこにいるんだ」
　ぼくは、暗闇のゾーンが明るくなっているのをイメージした。
　そして、
「クローン神よ、我に力を……」
　　ドスーン
　ぼくは何かにぶつかって転んだ。
「いたーい！」
　ぼくは気づいた。この大声は……。
「あやめか？」
「龍魔なの？　よかったー。それにしても暗いわね」
　ぼくは魔法の呪文が途中なのに気がついた。
　そして、落ち着いて唱えた。
「クローン神よ、我に力を与えたし」
　　ピカー！
　一瞬光ったがだめだった。
　もう一度、と口を開けた時あやめが言った。
「ねえ、さっき光った時見えたんだけど、この部屋四角形になっていて、かべに一つずつドアがあったよ」
　その時、じいさんの声がした。
「はっはっは！　よく見抜いたな。この四つのドアの一つに、暗闇のゾーンから出られるドアがある。このドアは特殊でなあ、一つまちがえてドアノブをひねれば二度と帰れんのだ。しかも、どのドアも、こいつらを倒してからじゃないと進むことはできん。お前たちにできるかな？」
　その時、何か光るものが二つ、ぼくたちめがけて走ってきた。
　その生き物はだんだん近づいてくる。
　ぼくは、ぶるぶるふるえながら立っているあやめの前に立ちふさがった。
　なぞの金色の生き物は、ぼくの二、三メートル前で止まった。
　ぼくは、おそるおそる金色の生き物を見た。
　おどろいて、腰をぬかしそうになった。
　だって、それは、
「レ、レオン？　さくら？　なんでここに……」

　そこでぼくはわかった。じいさんが、
「愛する人と闘えるか？」
　と言った言葉の意味が。
　レオンがいきなり火をふいてきた。
　さくらは矢を投げてきた。
　ぼくはいい考えがうかんだ。ぼくはレオンとさくらが結界の中にいて、閉じこめられているところをイメージした。
「クローン神よ、我に力を与えたし」
　すると、レオンとさくらは閉じこめられ、レオンが、
「三番」
　と叫んだ。
　そのとたん、暗闇のゾーンは明るくなり、結界と共にレオンとさくらも消えてしまっていた。

　いつの間にか、あやめは気を失っていたようだ。ぼくが起こすと、
「あら？　あの金色の光る生き物は……」
「あれはレオンとさくら。そう、お父さんとお母さんだったんだ。でも本物のお父さんとお母さんじゃない……。一体どこにいるんだ！」
　ぼくとあやめは、三番と書かれたドアを開き、中へ入って行った。三分くらい歩いただろうか、さっきの奇妙な動物が立っていた門より大きく、豪華な門があった。
　その横には看板があった。あやめがそれを読んだ。
「この問題に答えられたら門が開く。問題。かっこよくてかしこい。そんなステキな魔法使いはだあれ？」
　ぼくはすぐにわかった。
「じい……」
「ピンポーン！　さあ、入れ」
　いよいよじいさんとの闘いだ。
　まずはじいさんの心臓をねらって、
「クローン神よ、我に力を与えたし」
　と魔法をかけた。
　しかし、じいさんには通用しなかった。
　じいさんの弱点はどこなんだ。
　その時、どこからかレオンの声が聞こえた。
「手足をねらうんだ」
　ぼくはその言葉のとおり、手足をねらって魔法をかけた。
　思いっきり集中して。
「クローン神よ、我に力を与えたし」
　すると、じいさんの足から血が出た。じいさんはあわてている。
　今だ！　ぼくはじいさんが倒れるのをイメージした。
「クローン神よ、我に力を与えたし」

ぼくが呪文を唱え終わったそのとたん、じいさんは倒れた。
この瞬間に、じいさんの中にいた悪魔を倒したのだ。
じいさんは、一言言い残して気絶してしまった。
「まだ下に地下室がある。そこに……」と。
「そうか、お父さんとお母さんはその地下室にいるんだな」
どんどん地下を進んでいくと扉が見えた。
でも、その扉にはカギがかかっている。
「くっそー、ここまで来たのに」
くやしさのあまりじたばたしていると、何かをけった。
「何かしら？　龍魔、リモコンよ」
とあやめが拾った時、親指でどこかを押した。
すると、何と、カギが開いた。
「お父さん、お母さん！」
ぼくはレオンとさくらに姿を変えられている両親の近くへ走っていった。
「龍魔、よくここまで……」
さくらは声をつまらせた。続いてレオンが言った。
「龍魔、最後の一仕事だ。さあ、魔法の呪文を！」
「クローン神よ、我に力を与えたし！」
……。

ぼくが目を開けると、そこには人間の姿にもどったお父さんとお母さんが立っていた。
ぼくは二人に抱きついた。
三人はしばらく言葉もなく、喜びの涙を流した。
……。

「龍魔、お父さんとおじいちゃん、そしてあやめちゃんを呼んできてちょうだい」
「は～いっ。お父さ～ん、おじいちゃ～ん、準備ができたよ。あやめも早く来いよ～」
「あいよ」
「ほーい。今行くよ」
「やったー。すごいごちそう！」
今日はぼくの誕生日。みんなそろっての誕生会が始まる。

そうそう、これを読んでいるみなさんにぼくから報告があるんだ。じいさんは完全にいいじいさんになったし、ぼくはお父さんとお母さんの魔法がとけてから、竜になる夢は一度も見ていないんだ。
でも、三人おそろいの時計は今でもぼくの宝物さ。